

魔法少女リリカルなのはAnotherFactor

おもね

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目覚めると、そこは自分のいた世界とは比べものにならない程自然に満ち溢れた世界だった。

バルドスカイの門倉甲、そのもう一つの因子である門倉紅として生きてきた主人公はリリカルでとらいあんぐるな世界で何を目的に生きるのか。

未来に望むは幸せな結末、手にいれたのは電腦の力。

魔法少女リリカルなのはAF、始まります。

目次

第一話：遭遇『ファーストコンタクト』	1
第二話：士郎は見た目若すぎだろJK	4
第三話：紅『AnotherFactor』	7

第一話：遭遇『ファーストコンタクト』

目覚めると、白いシーツの海の中にいた。

柔らかな日差し感触が心地よい。

「…流石に、地面に寝てる状態でそんな始まりが出来てたまるか…いや、しかし原作ではそうだったな」

目を開き、周辺の様子を確認しながら起き上がる。

見た感じは山の中、しかし学生時代にしろ傭兵時代にしろ、このレベルで自然が残っている山は少なくとも近辺にはなかった気がする。だとしたら構造体だろうか？しかし、風の流れや葉のざわめき、土の匂いからここまでの物を再現する為にはリソースが無駄すぎる。

「取り敢えず、環境探索プログラム起動つと…」

今起動したプログラムはなかなか便利な物で構造体の中ならその構造体のパラメータや所属サーバー、現実なら周囲の環境がどのレベルでクリーンなのか等を調べてくれるツールだ。

ちなみに体内に打ち込まれているノイ謹製自己増殖型ナノマシンを媒体としている。

結果はSランクの現実環境、身体に直ちに影響を及ぼす深刻な汚染はなし…と。

「なんとも理想的な環境だが…それにしてもGOATの手が入ってる様子が無いってのは驚きだな」

眩きながら体を起こし、異変に気付く。

これは何とも深刻で、どうしようもなく致命的とも言える異変だ。

「体が…縮んでる…?」

そう、恐らく視界に映る木々の地面からの高さを目算して140cm前後。

確か、記憶が正しければ9才ごろの身体になっていた。

慌ててバイタルチェックプログラムを起動。

出てきた結果は余りにも容赦無く俺に現実を突きつけてくる。

「身長140cm、体重43kg、筋肉量、柔軟性がなぜか元の体と同じくらい、シミュキラムは現在の体に合わせて最適化中か」

すなわち、原因不明の何かが起こり天然には既に存在しない環境レベルSの山の中に肉体スペックがほぼ現役状態と同じ小学校3年生の状態に放置されているという何とも訳のわからない状態だ。

「目的も何もわからないが取り敢えずどうするべきだと思う？覗き屋さん？」

そう言った問いを背後の木立に投げかけると誰もいなかったはずの背後に1人の人間が現れる。

「驚いたな、君みたいな子供に気付かれるほど衰えたつもりはないんだが・・・」

そう言いながら腰にさしてある小太刀から現れたのは見た目大学生ぐらいの青年。

しかし立ち振る舞いからは自分と同じ様な裏に関わる人間と同じ類の剣呑な気配を感じる。

「こんな見た目ガキに見えるヤツに対していかにも興味深々です、見たいな視線を投げかけてればこっち側の人間なら気付くだろう？それで、お前が俺がこうなった元凶か？大方GOATかドミニオンの人間だろうが何を企んでやがる？」

「さて、GOATもドミニオンとやらも知らないが僕たちの目的については語る事は出来ないね。まあ取り敢えずは君の「確定、あんたはシロだ。しかし厄介だな」・・・む？」

何だか呆れ果て取り敢えず地面に座り込む。

「何がなんだかわからない、みたいな顔してんなよ・・・単純に説明するとだな、GOATもドミニオンも知らない人間がいるはずが無いって事だ」

「しかし、現に僕が知らないじゃないか」

だから厄介なんだ。

「そこで一つの仮説が出来るんだよ。ここは俺が居た世界じゃないどころか別の世界何じゃないかっていう仮説がな」

とそこまで言い切った所で腹が鳴る。

仕方あるまい、少なくとも意識を失う前は勲さんと糞オヤジのせいで4日ほど食事も取らずに作戦行動に従事していたのだ。

「あー・・・どうだろう、提案なんだがうちの店で食事でもどうだい？ 詳しい話も聞きたい事だし」

思わず啞然としてしまう。

「申し出はありがたいんだがよくこんな得体の知れない人間を食事に何て誘えるな？」

「なに、これでも人を見る目はあるつもりだからね。それで、どうだい？」

もう一度腹の音、まあこの男は纏う雰囲気はともかく見た目通り「いい人」に分類されるやつだろう。

違ったら違ったでノイ印のナノ式護身グッズの数々で何とかなるはずだ。

そう思いつつ立ち上がる。

「まあ状況的にこれからどうするか迷ってた所だ。話だけで飯を食わせて貰えるなら喜んで乗ってやろうじゃないか」

苦笑しながら振り返りついて来いと仕草で合図する男に何ともやり辛さを感じつつ、取り敢えずついて行くのであった。

しつかり考えてみれば俺の見た目はまさにガキだ。そんな奴があるんな喋りかたをすればそりゃあ苦笑いの一つや二つも出るだろう。

そんな事に気が付いてその日の夜にベッドで身悶える事になることを彼はまだ知らない。

第二話：士郎は見た目若すぎだろJK

さて、目覚めた山の中で出会った青年にホイホイ行って行った結果案内されたのは翠屋と言う喫茶店。

道中士郎の話聞いてみるとどうやら彼はこの翠屋のオーナー兼マスターらしい。(問いかける時にお前と言っていたら士郎と呼んでくれと言われた)

見た目にそぐわず32才で元の俺より7才も年上だ。

久しぶりに生命の神秘を垣間見た気がする。

彼には25才の奥さんと15才の長男、13才の長女、5才の次女が居るらしい。

お前奥さんにピー才の時子供産ませたのか・・・と呆れ果てて見せたらどうやら彼の連れ子で長女は彼の妹から預かっているのだとか。

うむ、中々複雑な家庭環境で我が門倉家もびっくりだ。(空と真的な意味で)

ちなみに移動は走ってではなく徒歩である。

この町の名前は海鳴、少なくともバルスカ世界ではそんな町は無かったので異世界だと断定出来る材料が増えてしまった。

しかし士郎、翠屋、海鳴か・・・前世で聞いた覚えがあるんだが流石に10年+15年×測定不能もの年月が経つと思ひ出すのが難しい。

まあそのうち思ひ出すだろうと考えつつ足を動かすのだった。

「あー・・・そうだな、信じられないと思うがツツコミは終わった後に頼みたいんだが、いいか？」

目の前には好奇心に輝く目が4つ。

右から高町士郎、桃子、美由紀、なのはだ。

唯一と言つていい警戒した視線を放つのは高町恭也。

「俺の名前は門倉紅。門に倉、紅と書いてこうと読む。まあ呼び方は好きにしてくれ。年齢は、あーそうだな、9才だ。星修学園都市の星修学園付属小学校に通っている」

星修は学園都市じゃないが付属小学校はある、俺は別の小学校だっ

たけどな。

「ふむ・・・聞いた事がないけどそういうことにはしておこう。それで、どうして山の中にひとりで居たんだい？」

後で詳しく話せよと目で語られる。

そりやあ流石に見た目小学生にもなっていない子供がいる前で語るには俺の経歴は物騒すぎるんだ、勘弁してくれ。

「そこを聞かれると何とも言えないんだけどな。とにかく俺がわかってるのは気が付いたら見知らぬ山の中に居たって事だけだ

」

こればかりは事実だ。

そしてふと思いついたのは二つの物語。

高町、海鳴、翠屋・・・もしかしなくてもらハカリリカル？

いやしかしたらハなら士郎は既に死んでいるはずなので（二次創作で聞きかじっただけで詳しくはないが）恐らくリリカルな方だろう。

「あら、小学生なのね。それで、お家に帰れる宛はあるのかしら？」

「いやー、それが中々厄介で・・・」

と言いつつなのはちゃん（5才）の方に一瞬視線を送る。

流石に誤魔化すことなく喋るにはちよつと席を外していただきたいものだ。

と言うか一々言葉を濁すたびに突き刺さる恭也の視線がうぎ・・・辛い。

「あー、桃子。そろそろなのはを寝かせないと」

「あら、もうこんな時間ね。なのは、明日も幼稚園だしそ寝ましよう？」

この夫婦一瞬でアイコンタクトしやがった・・・。

「やー、なのはももつとこうくんのおはなしききたいのー」

「明日幼稚園が終わったらたつぷりお話してくれるわよ。ね、紅くん？」

「え、ああ。帰ってきたら沢山お話しような」

「むー・・・やくそくだよ！おとうさん、おにいちゃん、おねえちゃんおやすみなさいー」

おやすみと異口同音で答える高町一家。

桃子さんがなのはを抱っこしてリビングから出て行く。

いい家族だな、なんてことを思う。

や、別に俺の家庭が崩壊してたとかそういうことじゃないけどさ。

「それでだ「ああ、桃子がくるまで待つててくれないかな?」・・・別に構わないが良いのか?そこのお嬢さんも含めて、女子供に聞かせる様な話じゃないと俺自身は判断しているんだが?」

いくら桃子さんがしつかりとした芯を持った女性でも、美由紀ちゃんがその見た目にそぐわぬ実力を持つ御神の剣士だとしても。

いやだつて、目の前で女の子が溶けて行ったりむしろ自分も溶けていったり、なんて話は女性に出来ないだろ常考・・・

「紅くん、君が見た目に似合わない程、過酷な世界で生きていたというのは目を見れば理解出来る。それに大丈夫、桃子と美由紀ならな!」
「いや、その大丈夫な根拠を説明しろ・・・と言っても無駄なんだろうな」

しかも美由紀ちゃんは「いやー、お嬢さんだつて。わたしそんなに美人に見えるのかな?恭ちゃん」なんてことを恭也に話しかけ呆れられた目で見られている。

「士郎さんお待ちせ、なのははもうぐつつすりよ!」

桃子さんが戻ってきた。しかし早過ぎないか?いや、幼稚園児ならこの時間ならアツサリ寝ても可笑しくはないか。

「さて、それじゃあ。本当の君について、教えて貰おうかな?」

そう言いつつにこやかにこちらを見る士郎を見て、ああ、こりやあ洗いざらい話すしかないな。

と諦める俺であった。

第三話：紅『AnotherFactor』

「さて、誤魔化さずに話して行こうか。名前についてと気が付いたら山の中つての『は』偽りは無い」

「と、言うことはさっきのは殆ど出まかせかい？」

仕方ないじゃん、と肩を竦ませる事で答える。

「本来の年齢は25才、立場としては統合軍対AI対策班外部受注PMC『フェンリル』、特殊遊撃部隊ハウンド中隊部隊長。階級は中佐だ。学生時代に星修学園都市に住んで居たのは本当だが星修学園に通うのは高等部になってからだな」

「あらあら、中佐さんだったの？すごいわねえ」

いや、確かに俺の年齢で中佐つてのはごく普通の観点からすればレアケースかもしれないがまさかすごいの一言で終わらせられるとは思わなかったぞ……。

「しかし25才か……とてもそうはみえないぞ？そこらへんはどういう事なんだ？」

「あー……そこが一番厄介だが一応、俺のいた世界の時代では技術的にはかなり進歩していてクローニングと記憶移行処置を利用した若返る方法は金額を除けばごく普通の技術でな」

「すまないがあなたが言っている統合軍もフェンリルにも聞き覚えは無いのだが？それにあなたの住んで居た世界の時代とはどういう事何だ？」

「恭也、と呼ばせて貰うが構わないか？ああ、あと俺の事は紅でも門倉でも好きに呼んでくれ、本来の年齢は上だが今はこんな見た目何だ。敬称はいらん」

「ああ、わかった。それでは紅と」

「あ、じゃあわたしは紅くんって呼んでいい？」

「ああ、構わないさ。美由紀ちゃん。恭也の疑問に答えるとまずは俺の居た世界と時代からだな、国際暦98年、こちらの暦に合わせる……土郎、今、こっちは何年何だ？」

「今年は西暦で2015年だよ」

となると・・・

「俺の計算が間違つて無ければ西暦でいうなら2335年ぐらいかな？技術的にはこの世界より遙に進んでいる。先程挙げたクローニングや巨大アークロジ、AIをベースに無限に広がるネットワーク群や様々な用途に使われるナノマシン等例を出して行けばキリがないな」

「ほえー・・・すっごい世界なんだ。・・・あれ？じゃあ紅くんはそのクローニングつので若返つたの？」

「いや、歳をとつてからとか生命維持によつぽどの影響がある怪我や病気でもない限りクローニングはしないよ。若返つた理由は俺にもわからないんだ」

「山の中で言つてたGOATやドミニオンつて奴らの仕業じゃ無いかい？」

「GOATは雇い主の略称だしドミニオンは俺たちの世界で3年前に下っ端の構成員までキツチリ片付けたからその線は無い。他の大小問わない組織から恨みを買っている自覚はあるが、少なくとも把握している範囲でそこまでの技術を持っているところは無かつたな」

「ふむ・・・君が言う『この世界』に移動した原因なんかについてはこの際どうでもいいか。裏にはオカルトやファンタジーじみた技術なんて腐る程あるしそういうことだと思つておこう」

流してくれるならありがたいな。そもそも空間移動技術なんてバルスカでも存在しないし。

しかしさすが都築ワールド、やっぱり裏の世界にはそういった技術がゴロゴロしてるのか・・・。

「でも紅ちゃん、来た方法がわからないって事は帰る方法もわからないんでしょ？これからどうするの？」

紅ちゃん、て・・・。

「あー・・・、確かに帰れないのは痛いですけど生きて行くぐらいは何とかなるんで、とりあえずは生活基盤を確保しつつあまり期待せずに調べてみる予定です」

戸籍とかはネットワークに繋がばどうとでも誤魔化せるしサバイ

バルの実戦経験は世界群の中で腐る程ある。

警察が厄介な時間帯にさえ動かなければどうにかなるだろう。

「桃子、いいかな？」

「ええ、もちろん。ねえ紅ちゃん？もし良かったら帰る方法が見つかる迄でもいいから我が家で一緒に暮らさない？」

まさか前世の二次創作で見たようにこんなにアツサリ誘われるなんて思っただろ……。

いや、確かにその提案はありがたいのだが。

「こちらとしてはありがたいんだがいいのか？そっちにメリットが無いと思うんだが」

「別にこっちのデメリット何て気にしないでいいんだけど……お願いしていいのなら、なのはと仲良くしてあげてくれないかな？」

「構わないが……それだけでいいのか？」

「ああ、問題ない。君の知識を貰ったとしても僕らにそれを扱えるだけの知識はない。それに去年は家にちよつとした事情があつてなのはあまり構ってあげられなくてね、情けない話だがあまり素直に甘えてくれなくなつてしまつたんだ……」

ああ、確か士郎が事故に会う見たいな事がどちらの世界でもあつたからそういうことなのだろう。

「わかつた。なら、世話をかけるだろうがよろしく頼む」

「それなら戸籍関係は任せてくれ、昔の縁で当てがあるからね」

「あらあら。じゃあ、明後日はなのはもお休みだし色々と買い揃えなきゃね。私、もう一人男の子が欲しいなつて思つてたのよ」

「紅、もし良かったら暇がある時に今まで経験してきた実戦について教えてくれないか？」

「あ、紅くんわたしも！」

いや、ありがたいのだけどあんまりにもアツサリ受け入れすぎだろうに……

苦笑しつつもこれから、騒がしくも楽しい日々が来るのだろうか、と思うのだった。